

# 大地のきずな

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-28-6 吉崎ビル 東都生活協同組合内  
TEL 03-6853-9950 FAX 03-6853-9970 seishoken1@gmail.com https://seishoken.net

発行者：鎌形 芳文  
編集責任：常任幹事会

## 「食糧の生産と消費を考える」総会記念シンポジウム報告 テーマ「地域における 持続可能な人材育成」

3月9日（土）新宿農協会館8階大会議室にて、「食糧の生産と消費を考える」シンポジウムを開催しました。（編集・事務局）

【司会・コーディネーター 生消研幹事長 大倉茂氏】

### 会長挨拶

食糧の生産と消費を結ぶ研究会  
会長 鎌形芳文

（多古町旬の味産直センター  
代表理事）

今農業者の70%以上が60歳以上で成り立っており、また今までの地域の中で農業に携わってくださる方たちもあと数年すると聞かれなくなり、2040年には農業者が60万人ぐらいいなくなってしまうと予想されています。地域が衰退するなかで持続可能な地域を作るためには人材育成が急務と思っており、今回「地域における持続可能な人材育成」をテーマにしました。農業者の育成や、持続可能な農地をどう確保していくか。また外部から地域に入り、どのようにその地域を発展させていくかというお話を伺います。今日は次の3名のお話を参考に、明日からの仕事に生かせればと思います。

### 報告1『有機農業の人材育成 熊本での取り組みについて』

講師：有限会社くまもと有機の会 専務取締役 田中誠氏



田中誠氏

### 産地紹介

熊本県で昭和50年に有機農業生産者と消費者の提携で無農薬野菜を広める会を作って現在に至ります。消費者に直接宅配をすることにプラスして、直売店

を作ったり、卸をやっております。40年前はなかなか有機農産物を手に入れる場所もなかったのですが、まずそういう場所を作り、売り先もなかったもので、自分たちで直売所を作ろうと始まり、そしてもっと仲間が増えてくると、県内だけでは販路が厳しいので県外も、と自分たちで広げてきました。

熊本は中山間地が多いので、例えば消防団でいえば20年、30年ぐらい前は100人ぐらいでその地域を担っていたのが、今は20〜30人。いつまでも辞められない。若い生産者が農業に専念したいけれど、人手不足の影響で地域のことができる人がいないため、本業を犠牲にして地域のことをするので余計に疲弊していく。もつと農業で食べられるようにしないといけないけれど、地域に誰もいないから、溝の掃除、草刈、道路のこと、消防団などをやらないといけない状態です。手が回らないとイノシシやシカや、ハクビシン、いろんなものが襲ってきて、自分たちの農産物がまたやられてしまう。現実はそのような状況です。

結論になりますが、人口と出口がちゃんとないと広がらない。人口は少しでも環境に良い農業を学べる場所が必要だということ、環境に良い農業をきち

んと教えられるような農業普及員さんも必要になっていきます。ただ出口が広がらないと継続ができない、人材がそこにとどまれない。

我々は地元で地道に活動をやって、無農薬で作られた大豆や麦で醤油を作り国産材料の希少性を体感してもらったり、毎年田植えや稲刈りの交流会のもあります。消費することだけじゃなくて、実際に体験し、現場で感じないと、その大切さ、物の価値はなかなか理解ができませんと思います。水田を守るという意味合いで加工品も作ったり、旬のものをバランスよくということ、まず地元での宅配が基本になっています。野菜セットを作ったり、収穫感謝祭も地元の消費者とやっています。経営状況は作付面積で60ha以上あり、年間の作付け品目は100種類ぐらいいやっています。標高0mから800mを産地リレーして、寒い地域から暖かい地域にバトンを渡すことで、安定供給しながら、仲間作りをしないところという取り組みはできないんです。

### 有機の栽培技術の確立

我々も長い歴史で手探りで有機栽培をやってきました。慣行から有機に変えるときには虫だ

らけだった。それを消費者の方たちが何とか買い支えてくれた時期があったんです。でもそれじゃいかんと土作りを勉強し、いろんな農法を試してきたりする中で、やっと有機農業の栽培技術、栽培理論が確立して、いろんな人に伝えられるという状況になってきました。

一つの例では、有機栽培でにんじんは結構厄介だったんです。草取りが大変で、秀品率が半分ぐらい、反当たり15tから2tしか採れなかった。それがだんだんと有機栽培の技術が確立してきて、今6t〜10tぐらい採れるようになりました。それを可能にしたのがBLOF理論に基づく太陽熱養生処理です。有機物と微生物と、太陽熱を利用して、3年かかる土作りを3週間でやってしまう技術を確認しました。トラクターとかで踏み固めるとできる20〜30cmの耕盤が、有機物と微生物の力であつという間に、機械で耕さずとも棒が沈み込みます。有機物と微生物の均衡といいますか、ある条件であるバランスで仕込むと、熱と水分があると勝手に発酵してふかふかの土を作ってしまうという技術です。これができることによって根物は劇的に変わりました。

お米の栽培では、ネオニコチ

ノイド系農薬、ジノテフランなどが地下水を汚染すると言われていますが、ウンカはセミ科なので、口針をぶすつと刺して稲の汁を吸います。だから茎が弱いと農薬をかけないと栽培ができません。だったら茎を頑丈にすればいいということで、普通の稲は折るとふにやつとしますが、ちゃんとした土作りをすると竹みたいな折れにくい硬い茎になります。こういったものが技術でできるようになったのです。

### 有機の学校

そのような技術が大体完成したので、広めている段階ですが、ただ広めるには限界があるので、学校が必要です。九州では福岡と熊本に学校があり、福岡は先日10期生の卒業式を行って送り出しました。熊本の学校は今度2期生の卒業式があります。

そのように地道に、技術を余すことなく公開して農業者を育成していくのは「入口」です。しかし、「出口」戦略のところでは繋がらないと、人材育成という話にならない。消費者の方にも食べ支えてもらって、そして間に入る流通の人たちはその橋渡しをする。こういう三位一体を今こそやらないと間に合わないのではないかと感じています。

また、化学肥料はほとんど海

外からの輸入ですが、地域において地域資源を利用した良い堆肥・資材を利用しないと持続可能ではありません。国内でも遠方から堆肥などを取り寄せたら、運賃だけで農業は成り立たないのです。

有機農業を長くやってきて、長所と短所があることに気付きました。勤や経験だけでやってきたのを、科学的な分析も取り入れながら20年ぐらいやっていきます。そのおかげでわかってきたことがいっぱいあり、有機栽培でちゃんとした土作りをする、非常に栄養価が高いものができるというのも、データが揃ってきました。その理論を伝えていかないと宝の持ち腐れになります。簡単には伝えられないので、学校が必要ということです。

また、子ども食堂へずっと有機野菜を提供しています。小さい頃に、本当に旬のおいしいものに触れてもらいたい。子どもは敏感なので、子どものときにそういう味や、地域のおばちゃんたちが一生懸命やってくれている人の温かみなどを感じてもらおうという取り組みです。

この有機の学校、福岡では先日卒業式で、卒業する頃にはみんな心が一つになって、それぞ

に、自分たちに何ができるかと行って卒業していきます。こういう人たちが毎年毎年世の中に出てくれば、きっと日本や地球は悪い方向に行かないという思いを込めて学校をやっています。私たちが何かマニュアル的なものを作っていけば真似しやすくなると思います。学校の経営は無茶苦茶大変ですけれど何とかやれる方法を考えています。それと同時に、若手新規就農者が勉強したいと言えば、学校は敷居が高いということで、勉強会をやります。また農家のグループに行つてその辺のハウスの中でバートと勉強会をやつたりと、とにかく活動を広めていきたいと思っています。

有機野菜はうまく作ると、抗酸化力がものすごく上がります。ただ有機栽培でもちゃんと植物の生理を理解して土作りをやら

ないと有機だからと言って栄養学的に有意性は認められません。その一方で作り方次第ではすごく収量が上がって高栄養価のものでできるということがわかってきました。闇雲に有機をやってもなかなか成功しないから、今から取り組む人は、ちゃんと勉強もして、先輩たちの経験や勘もミックスしながらやらないと、10年20年30年かけて一人前になつても経済的に追

追いつかないと話をしています。有機や自然栽培という理想を追いかけても、農業を続けていくためには作ったものがちゃんとお金に変わらないといけない。だからと言ってこんなに努力をして多少虫食いがあっても、収量が半分しか取れないから消費者の皆さん倍の値段で買つてくださ

いと、支えられない人が出てきます。だから、ほどほどの値段で提供できるような栽培技術を私たちがマスターしないといけない。消費者のためにも有機栽培でも高品質で多収穫できる技術を学ぶ必要があります。その技術に特化して勉強してきた結果、ある程度慣行栽培と引けを取らない、もしくは慣行栽培よりかなり収量が取れる技術があることもわかりました。

実際の有機農業の技術をお伝えするのに、大体60時間ぐらいあれば一通りのお話はできるかと思つています。あとはもう実践です。机上で言つても、現場では違うというのが絶対あつて痛感しています。ある程度理屈がわかっていると、あまり遠回りしなくていいかもしれない。失敗は成功の元と言いますが、失敗したときに、もしかしたらこうすればいいかなというアイデアが出る失敗と、本当に何

も分からない失敗では違うので、勉強することで失敗を次につな

げるきっかけができるんじゃないかと思いい、取り組んでいます。

## 報告2 『養蜂での耕作放棄地解消から里山再生』

講師：株式会社ONE DROP FARM 代表取締役 豊増洋右氏



豊増洋右氏

### 人と地域のレジリエンス

今日は人と地域のレジリエンスをお話したいと思います。とにかく何がわかるからない世の中になり、異常気象やお正月も大変な災害がありましたし、感染症や世界的な政情不安、また今アメリカで大統領選がありますが、どうなるかわからない状況で、おそらくダメージを受けないことはないと思っています。熊本でも2016年に大きな地震があり、経営で予測してないタイミングで、予測してない規模の大きなダメージを受けることはもう覚悟しなきゃいけない。そのときにもう折れなければいいと思います。ポキッと折れずにしなる、物理学用語らしいんですが、しなっ

元に戻る力をレジリエンスと言います。絵的に表現すると竹です。竹のような、人間の心であったり、あとは組織も崩れない、会社も折れないで、地域も折れない、ダメージは受けるけれど戻る、そのレジリエンスの高い経営をしたいと最近考えています。それを特に強く思ったのは2019年、千葉県に大きな台風があり、うちも中山間地域で倒木があつて道が通れなくなりました。停電が続き井戸は発電機でポンプを回して給水をしてた

いへん苦労しました。翌月また台風が来て土砂崩れと竜巻があり、うちの周辺だけで40ヶ所以上土砂崩れがあり、畑に行く唯一の道が越水で崩れました。中山間地の厳しいところは、中心市街地の復旧が優先されるので、何か被害があつたときに復旧が遅いことです。この道が繋がるのに1年半かかりました。その間30分ぐらい遠回りして、だからといってキャベツを高く買ってください、にんじんを高く買ってくださいというわけにはいかないので、どうやったら農業経営のレジリエンスを高めていけるかというのが最近の悩みです。広げていくとか増やしていきたいという気持ちもあるのですけれど、まず自分が潰れないこと、そんな気持ちでいます。

### 蜜源植物と緑肥を活用した輪作体系

2010年に木更津で有機農業を始めて7年経ち、そこを辞めて市原市で声をかけていただいて農業法人を作るときに、50年ぐらいの耕作放棄地がありました。市原市は日本で一番ゴルフ場が多く、不動産屋が買収したゴルフ場になり損ねた農地が

いっぱいあり、耕作放棄されて50年経つと森に戻り立派な杉林ができるのですが、クヌギなどの蜜源樹木だけ残して間伐して5年ぐらいかけて再生しました。千葉県ではちよつとチップな観光事業をやりたいなつてしまつたり、人件費などいろいろとコストが高いので、消費地に近いからといってやりやすいわけではないと感じました。

50年来の耕作放棄地ですと、1本の直線もない不便で道路に隣接していない畑もいっぱいあります。そういう効率が悪い畑をなるべく経費をかけずにいい土を作っていくために、僕もBLOF理論、有機物と土壌微生物を増やしていくような土作りが一番理にかなつていてと考えています。それには緑肥が非常に役に立つ。ソルゴーという緑肥も慣行農家や地域の方には雑草にしか見えないので、地主さんに早く草を刈れと言われてしまふ。農業委員さんも緑肥はわからない方が多いので、草ばかりで畑を荒らしているのを農地を返しなさいという是正のお手紙が毎年来ます。

緑肥の中でも蜂蜜が採れる植物を蜜源植物と言います。何百種類もあつて、身近なところでシロツメクサ、白クローバーなどは、窒素固定にも役立ち、根粒菌も増え、緑肥にもなります。また被覆力、カバークroppとしての効果もあり、これだけ夏が暑くなつたり、乾燥が続くと、一年中地面を被覆している種が保湿力も含めて非常に重要で、5、6種類混ぜて撒き、1年中心が裸にならない状態をキープしていくと、厚さ大体5cmぐらいのマット状の有機物が土の上に乗っている状態になります。おまけに蜂蜜も採れ一石五鳥というので、そのような植物を選定しています。

土ができてきたら、土壌分析をして作付けしたいところだけ有機野菜を作って流通させていきます。そして作付けが終わつた

ら緑肥に戻すことを延々と繰り返しています。それを繰り返していくと有機物の微生物も非常に豊かになり、多少線虫も出るとは発生することはなく、有機体窒素が蓄積され、窒素肥料はもう入れなくていいという状況になり肥料は買わなくなりました。

道路に隣接していない畑で堆肥を散布する手間を考えると緑肥は理にかなつており、今JAS有機で7.3haあるのですが、作付けしているのは2.5ha、1/3くらいで、蜜源植物と緑肥をローテーションさせています。基本は花畑にして、そこにミツバチの巣箱を置いて、作付けの前年に次の作物に向けた緑肥を設計して、例えばにんじんを植えるのであれば、からし菜入れたり、燕麦入れたりして、線虫抑制をしてから作付けに入ると、ようなことを繰り返していると、畑によっては2年ぐらい作付けしてない。お花畑と草という状態になり、このメリットは作付けに余裕があるので、マルチはがしが間に合わないとか、太陽熱養生処理に失敗したとか、片付けが間に合わないときの逃げ場がたくさんあり、スタッフの体力的な負荷も軽減できるようになつてきました。

作付けしない圃場は基本年1

回の草刈りで済むようにしています。花が綺麗なので、地域でJAS有機以外にもたくさん出てくる遊休農地をいろんな方と協力して種まきイベントをやつて、緑肥や蜜源植物の理解を深めるといふことも続けています。ジェフユナイテッド市原・千葉のプロサツカーリーグの選手の皆様と一緒に種撒きもしています。

### レジリエンスを高めるための経営

今、有機野菜が主にあつて、副産物の蜂蜜が採れる。これを基軸に体験や研修があつて、加工品があるというポートフォリオを組んでいます。本場に「出口」が大事で、今うちで6部門あり、商品では流通の合う合わないがあつて、スタッフは僕と社員が1人、アルバイトが4人いるだけなので、販路をしっかりと認識して闇雲に動かない。蜂蜜は1kg大体1万円ベースで販売しています。スーパーに売っている値段の4倍で買つてくださる方にアプローチするには対面販売など説明できる環境の売り場を選んでいきます。道の駅や産直売り場、農場の倉庫の横に売店を作つて売るのが主です。一方、有機野菜、生鮮野菜はなんととっても小売店が出ますので、小売店向けの流通をしつ

りと確保していく。百貨店で取り扱っていただくようになつてきました。

蜜源植物で圃場を管理するメリットがもう一つあり、これを新規の有機農業やりたい方を招き入れるための起爆剤として考えています。まだ実現はしてないのですが、遊休農地が出てくるときに、有機的管理を開始していく。僕らが2年も3年もお花畑にしておけば、新規就農の方がいらしたときに、書類さえ出せばその日からJAS有機で出荷できるようになります。新規就農希望者の3割以上が有機での就農を希望されているということです。就農してから2年間はJAS有機認証が取れないので、その間の収入を考えると明日から出荷できるという環境を作つておくことが、可能です。

養蜂教室や、お店にいらつしやるお客様向けにバームクーヘンなどの加工品やドリンクを用意したり、外部の販売や研修受け入れにも力を入れて、組織の中でレジリエンスを高めていくために、あの手この手、考えながらやつており、なるべく何が潰れても他で生かせるような形をとっているのがうちの会社の経営です。そのために大事なのは人材で、マルチタスクが

こなせるスタッフを厳選しています。ただ、たまたまその地域にいる人とやるというのが農業の面白いところで、日頃出会うお客さんとかアルバイトのスタッフとか、この人ができるんだらうというのを、作物を一生懸命見ると同じくぐらいの情熱で人を見ると、意外な長所があつたりします。

### 今後に向けて

今後やりたいことは、一言で言うと、市原市瀬又から世界へと大きく出してみました。千葉県は千葉県南北問題があり、北総という千葉市より上は鹿島から都内流れていく物流が発達して、農業に非常に有利な地域ですが、南房総は物流が未発達で、宅配便でないと商売ができない農家の方もたくさんいて何とかしたいと思つていました。県内

物流をいろんな方たちと提携しながら、薄く広く散らばつたような物流を細かく集めて千葉県内で流通する、そんなこともできないかと考えています。というのも7年前にこの市原市の瀬又というところで農業を始めたんですが、地元の方が非常に温かくて、何とか地域に恩返しをしたいと思つていたところ、瀬又って、カタルーニャ語で「種は撒かれた」って意味があつた

のです。やつぱり種まきを頑張らなきゃと、コツコツやつていきます。

今、業界の垣根を越え千葉県のオーガニック、ちびおというブランドをやっています。農産物流通業界だけじゃ解決できない課題もいっぱいありますが、違う業界の方が見たらできるといふこともあり、知恵をいただきながら取り組める環境が整つてまいりました。千葉県は有機農業の大先輩がたくさんいらっしゃいます。ご指導いただいて、僕らも次の世代にバトンを渡していけないといけない。瀬又から世界へと言ったのは、加工品もこれからしっかりと力を入れていきたい。あとやつぱり味で評価されていきたい。今まで千葉県はおいしそうないメージがなくて悔しい思いがありました。た



田口太郎氏

### 報告3 『地域の持続に向けたネットワークと地域づくり』

講師・徳島大学 大学院 社会産業理工学研究所 教授 田口太郎氏

また千葉県のガストロノミーコンテストで応募したトップ30に入り、有機野菜をおいしさと世界に打って出たいと考えています。そのようなビジョンを行動指針に移すための言葉として、「点滴岩を穿つ」。ONEDR O P F A R Mという会社名の由来にもなった言葉ですけれども、小さなこともコツコツやつていけば大きな石に穴が開くように、ものすごい結果を生み出すことができるという意味もありつつ、逆の意味もあり、小さなことも怠ると、とんでもないことになる。だから1個人の手は抜けないという両方の意味があるんですが、コツコツ手を抜かずにやつていけば大きなことも成し遂げられるんじゃないかという希望を抱いています。

### 「人口減少」問題をどう捉えるか

私は建築の出身で都市計画の研究所に進んだのですけれど、先生から農村は面白いと言われて行つてみたところ、はまつてしまつて、徳島大学に赴任してから8年前に佐那河内村という

徳島市に隣接している人口2000人、私が住んでいる集落も11世帯しかない小さな村に移住し生活をしています。現場では大学の先生が喋ると、理屈しかないと言われることが多い、だったら農村に移住して、出事（でいこと）などいろいろなことが大変という話が出ますが、どのくらい大変なのか、とやるべきことを全部やっています。草刈、寄合、お祭り、消防団もろもろ。なり手がいないので、消防団は来年度から分団長をやらざるを得ない状況です。

一昨年、農水省の長期的土地利用の委員会があり、そのメンバーに入っていました。粗放的土地利用という、いかに楽に管理するかという話は出てきたのですが、先ほど豊増さんがおっしゃっていた、予備地としてどう使うかという視点が必ず必要だと思いました。農水省は「業」ということを出すのですが、「業」というより暮らしの一部にした方がいいと思っております、そうすると有機であることの重要性がもっと伝わる気がします。「業」と考えると専業主義になってしまう。

人口減少と一言いってそれ以上考えていない。国も同じで、少し前に内閣府の「まち・ひと・しごと創生本部」の会議に出たのですけれども、経産省が考える人口は労働力人口です。労働力人口とか商圏人口とか言いますが、今物販はほとんどインターネットに置き換わっている。また、地方の産業が衰退している一つの要因が労働力不足で、農業でも後継者不足は大きな問題になっている。そこで経産省が躍起になって地方の小企業の後継者育成、事業承継を進めているが大体うまくいかない。自分が大事に作ってきたものを引き継ぐので、単純に補助金を出してお見合いをすればすぐ承継できるものではない。私が大事にしているのは地域社会の担い手の話です。どうやって担い手を位置づけるか。

これに対する政策は、産業政策としての事業継承や外国人労働力です。地域社会に行くと人口は担い手かという、最近価値観の多様化があつて、例えば町内会に入りたくないなどよく都市的な話題になります。農村でも同様です。単純に人の数が地域の戦力として表せないことを前提としなきゃいけない。もかわらず、日本中のいろいろな議論が人口ベースで行われてしまう。10年前に消滅可能性自治体という大きな言葉が出ました。今年第2弾が出ます。地方はもっと厳しい状況に置かれる。それに対してどういう逆襲をするか研究仲間で勉強会を立ち上げていますけれども、そういうことを考えていかなくちゃいけない。ただ一方で農村で生きていくために農業をやることも大事なんですけれども、今高齢化した人たちが暮らし続けることも大事です。

## 二つの分岐点

そこで大きな分岐点だと思っているのが2022年です。農業農村を支えてきた団塊の人たちが75歳を超え後期高齢者になると、結構足腰が悪くなつてくる。今まで地域づくりを頑張ろうとやってきたことが、かなりしんどくなるのがこれからの時代です。僕らの世代は20年後も住み続けなきゃいけないけれど、一方で地域の意思決定はほぼ70代が握っている、そこに大きな問題がある。

もう5年経つと団塊の世代の人たちが80歳になる。車がないと生活できなかった人たちも車の免許返納を本気で考えないといけない。運転できる能力があるかではなく、決して安全じゃないけれど運転しないと生きていけない。自動運転も5年後は多分間に合わない。どうするか考えないと息の根を止められてしまいます。

今、能登半島地震で当事者不在の中、集落再編議論が加速している。当事者不在で集落再建が進むのは非常に危うい発想で、財政難が影響しているけれども、それに対してきちんと地域の力を作っていくかなくちゃいけないことが大きな問題としてあります。地域づくりの世界だと30年ぐらい前から人口で地域の力を測れないとなっていたのですが、10年前の消滅可能性自治体からこの議論は完全に吹っ飛び、全てが人口基準になつてしまっています。

## 自治の空白を埋めるには

今、地方創生が盛り上がりつつありますが、地域の人たちからは関心を払われていない。たとえば、地域おこし協力隊が勝手に楽しんで我が物顔するから軋轢が生まれ、若者と地元の人たちで炎上事件が多発しています。お互いのコミュニケーション不足ですが、自治体の人たちはとにかく若い人たちが来てくれればいいという話になります。最近若年女性が地域から抜けていくことが人口減の最大の原因で、若年女性を地域に留めると言っていますが、この20年の間で若い女性の進学率が飛躍的に上がった。それは良いことなのに、国・大学の政策はいかに地元に残すかという議論をします。そうではなくて、戻りたくないような地域づくりをしよう。今までは出たくなるような地域づくりをしてきたのです。

「郷に入つては郷に従え」という言葉がありますけれども、その郷自体に相当大きな問題があった。農村の合意形成や消防団はその典型です。昔は住民も力があつた。若くて、人数も多く、行政にも力がありました。平成の大合併になり財政効率化で役場は地元出身者の割合が減つて忙しくなつた。住民側は少子高齢化が進み、隙間が生まれています。例えば国道周辺の草刈りの回数が減っています。メンテナンスをするお金がないからです。この先どんどん広がる一方で、埋め方を考えなきゃいけない。ICTの活用など方法はいくつあるのですが、ほとんど埋めることは難しいので、セーフティネット、基本的な人権を守ることに注力していかざるを得ない。地域は高齢化が進んでいく。だから移住とか、関係人口とか、民間企業とか、地域

に入りたい人たちの力をどう使うか、また、全体のパイを減らしていくこともどこかで必要かと思っっています。これから日本の人口も減っていくので、今の日本の農地を全部守り続けることが本当に妥当かどうかという

と、上手に撤退することもおそらく必要です。ただ、日本の農地はかなり個人所有が進んでいますので、集落営農にしない限り戦略的な縮退ができない。移住者が良い農地を与えられずにいる一方、良い農地が耕作放棄になったりする。それを上手に管理していかないとまずいのがこれからの時代です。

農村に行くと、8時から草刈りだと言われて、8時に行ったら終わっていたみたいな話は結構あり、軋轢になってしまいう。だから「集落の教科書」という不文律みたいなものを全部明文化しようという取り組みがあります。これには裏テーマがあり、明文化していくと自分たちが今までやってきたルールのおかしさに気がつくんです。物事を決めるときはまず誰々さんから話を通すことというような話がいっぱいある。そういう裏テーマを持ちながら地域の中にちよつとずつ柔らかない空気を作っていくと、若い人も入ってきてやすい場所ができてくるん

です。

今、地方の時代とよく言われるので、企業も若者も地方に行きたがりです。でもその人たちがちゃんと隙間を埋めてくれる存在かどうかというと、結構怪しい。地域を維持するのに必要な労力は人口と同じように減ってくれませんか。しかも最近価値観が多様化が進んでいて協力的じゃない人もいます。それなのになぜ地域が維持できているのかというと過剰に頑張っている人がいるから。でもそれが地域衰退圧力になっており、ここを軽やかにしていくことが大事で、余計な負担を減らすとか、農業も上手に効率化し、きちんと儲かるようにすることも必要です。地域の新しい参入者、移住者も全員が仲間とは限らないのが現実です。地域に良い関係を築く人と、そうでない人たちも結構いる。逆に言うと、住んでなくても良い関係を築く人も結構いるんです。僕の消防団の分団も半分ぐらいは村民ではなく、大体車で20〜30分の村に近い徳島市に住んでいます。地域の豊かさを管理するのに結構な労力がかかり、担い手になってくれないと地域は持たない。でも住んでない人たちはわからないまま無配慮にフリーライドし、地元の人には怪しい目を向け始めま

す。それは非常にもつたないないので、自分たちにとってどういう仲間が必要かを地域として考えられるかどうかなんです。人口ではなくて、自治力、地域を維持するのに必要な労力をどう確保するか。今までは住民はすごく大事にされてきました。ただ市民、シチズンシップという市民権みたいな言葉として理解した方がわかりやすいと思っています。人が出ていくことは残念なことですが、別の考え方をすると、そこに新しい人が入り込む余地ができます。これを

どんどん作っていくと広がりが生まれる。今まで住民だけで頑張ってきたところを外にいる人たちも含めてどう頑張れるかを考え直すべきなのに、未だに住民至上主義で集落で全部完結しようとする。RE S A S（リーサス）という経産省の統計を見ると、ある地方の自治体の転出はその半分ぐらいは県内で遠くに住んでない。だから消防団など通いながらできる人も結構います。また、東京にいてもできることがあり、例えば私の村出身で東京に住んでいるおばあちゃんが東京で勝手に村のアンテナショップを作り、村では20人ぐらいしか阿波踊りの連員がいなくて、東京支部には200人いる。こういうことで村の可能性

がどんどん広がっていく。関係人口はいずれ移住してくれるかもしれない人と位置づけられています。出た人たちを関係人口の枠内に留めておく方が遥かに可能性が高いし、役割があります。地域づくりを頑張っている人には、東京大阪に出て戻ってきたら地域の疲弊ぶりに心打たれてたUターンする人が非常に多い。これからの時代のまちづくりや地域づくりをどう支えるかというところ、今までここだけで頑張ってきたものを、近くにいる人、都市にいる人、みんな頑張ることはすごく大事ですが、関係人口論ではこの関係性が完全に抜け落ちていきます。住んでいる人たちだけでなく、信託できる、信用できる仲間を位置づけていく必要がある。農業においても信頼できる相手じゃないと任せられない。補助金を出せば引き継いでもらえるという話ではなく、自分が頑張ってきた土地を提供してもいいと思える相手であるかどうか、こういう関係性のネットワークを作っていくと、地域の人口が減っても支えていくことができ、それを最後に申し上げておきたい。

### 集落点検

高度経済成長以降日本の農村

に指示されるままに動いてればいいという雰囲気がかびりついてしまっているのが、地域の将来をもう1回地域の人たちが具体的に考えないといけない。最近集落点検のワークショップをやっています。地域の地図に皆で単純にシールを貼るだけです。75歳以上を黄色にして18から74歳を女性を赤に、男性を青にして18歳以下を緑にします。その後、今の年齢に10足してくださーいと言います。そうすると結構リアルです。この10年で地域の状況が劇的に変わるとわかり、地元の人にはとします。心を折らない程度の危機喚起で自分たちの地域の現状をリアルに理解して、今度はこれに農地を全部入れると、どの農地が耕作放棄になるか全部示していき、こういうワークショップを重ねています。

今農水省が地域計画、去年と今年の2年間で日本の全ての農業集落に将来ビジョンを描け、と言っていますが無理に決まっています。無理なので農業委員の人たちは適当に形骸的にやって、それによって国の方針が全部決まってくるのでとてもまずい、そういうことを切り替えないといけないという話を申し上げておきたいと思えます。



**田村氏**…田中さんに、太陽熱養生処理で有機栽培しているとのこと、1週間でそんな早く効くのか、その前に土壤に何かさき込みをするのかお聞きしたい。豊増さんに、自分でハチミツを採ってみたいと思ってるけれど、どのようにすれば良いのかお聞きしたい。

**田中氏**…太陽熱養生処理は、微生物と有機物の均衡などで土が柔らかくなったり、悪い菌が収まってくれます。重要なのは温度がある程度ある夏場であること。ポイントとして中熟堆肥を使用する、要するにエネルギー、カロリーです。完熟堆肥と中熟

堆肥の違いは、完熟は微生物がエネルギーを全部堆肥化していくときに使ってしまう。中熟はカロリーを残して、畑に入れたときにエネルギーを使って微生物が活躍できる。もちろん土壌分析をして詳細に過不足がないかを調べて施肥設計をするけれども、微生物が働く適度な水分や温度環境を管理して整えると、普通の畑ぐらいいたら1ヶ月ぐらいで耕盤を抜くぐらいのことができます。

**豊増氏**…今養蜂はすごくブームですが、畜産業ですので、責任のある飼いができるように勉強することをお願いしています。ミツバチにもアメリカカ腐蛆病という家畜伝染病があつて、それが出ると養蜂場全部焼却しなきゃいけない。ミツバチの減少は世界的な問題になっていますが、一番は蜜源の圧倒的な不足で餌が少ないのです。草花は平面的、二次元的にしか花が咲かないから、密の量でいうと圧倒的に樹木で森が必要。今大事なのは個々人で蜂を育てることではなくて、ぜひ樹木や森の多様性に貢献するような活動に力を注いでいただくと養蜂家としてはありがたいと考えております。

**村田氏**…温暖化の問題に加え、4月からトラック輸送の時間外

労働の制限、愛媛県の柑橘のように首都圏しか競争できないところがない産地は厳しい状況。もう一方、遠隔地の有機農業団体にとっても新しい局面が出てきた。一つは直売所が力を持って地域で有機産品を販売できるようになった。それから、いすみ市に発する学校給食の有機化や地産地消が全国に広がる中、農水省は2022年にオーガニックブレッジ宣言を行い、本格的に地域に堆肥センターを作って農協が管理して耕畜連携しようという動き、また学校給食の有機化が生産者団体の側から出てくることで地域の地に地元有機農業があることが認知・支持されるという新しい局面にきていることを感じています。担い手が高齢化する中で、このオーガニックブレッジ宣言と緑の食料システム戦略を活用しながら、JAS有機農業団地を構成していく時代が来た。また県外から若手が参入し、地域おこし協力隊はうまくいってないところもある一方、地域に貢献し、地元で結婚したり、出身者の30歳代40歳代女性が地域で事業を行う会社の社長になっている、新しい時代が来ていると思います。

**田中**…温暖化の影響で薬物が作りにくくなって、農薬を使わずに作るのは困難になっていますが、ベースになる堆肥のクオリティを揃えると有機でも平均点以上はいける反面、良い堆肥がない。必要な堆肥なのか、表現が悪いけれど、フンの捨て場になっているような堆肥なのかを調べると、全然植物や微生物の環境が違ってくる。堆肥のクオリティを上げるには生産者にも勉強してもらわないといけない。基礎的な農業理論も必要なので学校なのです。

**田口氏**…作物を限定した栽培がいいか、小規模多品種がいいのか。品種を限定したような仕組みは、環境や農繁期のことを考えると考え直すタイミングではないかと思っていて、皆さんのお考えを聞きたいです。

**田中氏**…少数多品目を栽培すると輪作体系も取れます。今はしっかり研究も進み、連作障害が起こらないで有機栽培ができるのですが、基本は輪作です。消費者も地元のを消費し、旬のものをバランスよく食べた方がいいですよ。それが一致するのは少数多品目栽培で、効率がいいと思います。

**田口氏**…物流が厳しくなると、そうせざるを得ない地域が出てきて、それは評価の仕方によってもいい方に転がるかもしれないという解釈ですね。

**村田氏**…今回の緑の食料システム

戦略は、経済戦略会議ラインではなく国際的に温室効果ガス削減目標を掲げた農水省の中からのボトムアップ型の政策です。従って残念ながら新しい基本法の案では位置づけが低い。スマート農業に傾き過ぎて、また担うべき農家を支える政策がなく、農家は苦勞するので簡単に乗れないけれども、オーガニックとエネルギー自給をセットにすると非常に面白い。私は前から内橋克人さんの提唱するフードとエネルギーとケアの自給権、これを村作りの基本にすると、外から人口を引き入れることができますと言ってきました。

もう一つ、多品種少量生産について、ドイツで1920年代に始まった有機農業運動の基本は資源経営内循環です。堆肥は外から買うものではなく、家畜を飼うのは牛乳や肉の生産より堆肥を確保するためです。新しい温暖化防止策の中でドイツは畜産を縮小しようという動きが出て、また畜産地帯が集中すると窒素過多問題が大変だから畜産を全国に分散させようという方向で、耕種と畜産分離型の有機というのは考えられないのです。

**田口氏**…戦後の日本の都市計画も同じですが、効率純化という動きを作ってきたから、街作り

も住宅だけの街を作った結果、いろいろ不便です。もう1回混在型の土地利用もライフスタイルも見直す、また農業では肥料などの購入でお金が地方から都市あるいは外国へ抜けていると指摘されています。せつかく地産をしても農業にかかるお金の

大半が地域外に流出するのを止めないといけないことも含め、いかに小規模で循環させるかは大きなテーマだと思っています。

**松本氏**・物流問題を受けて、和歌山から関東まで15倍ぐらい運賃が上がる見込みです。遠隔地は物流の変化も起こるでしょうが、稼ぐために外部へ出すけれども、地産地消プラス、全国市場の商圏でなくブロックあたりで止めて、地産地消よりも少し広いエリアで売るといふ動きは、いい方向になると思います。

質問は田中さんの学校の運営形態を知りたいというのが一つ。田口先生には農業経営基盤強化促進法に基づいて2025年度3月末まで地域計画を立てるのあと1年ほどしかない。目標地図で10年後の各法人の担い手の明確化があり、自分の経営がどうなるかもわからないのに、本当に計画を立てられるか、そこにエネルギーを費やす意味があるのかと疑問に思っていたのと、暮らしの観点が全くない。

物を作る土地を埋めるには人がやらなきゃいけないのに、生活するコミュニティが維持される形も合わせて考える視点が欠落した中で、その地図を描く意味がものすごく気になっていました。

**田中氏**・学校は福岡と熊本で、福岡は株式会社で毎週水曜日、午前中に現場、午後から座学を行っています。講師陣は福岡、九州や東京等からも様々な分野の生物・化学・物理や有機JAS、経営の講師陣が来られています。1人年間38万円ぐらいの費用ですが、全然足りないもので、いろんな企業からサポートを募っています。熊本の場合はNPO法人で月に1回土日だけで、その他にも希望があれば地域の先輩農家のところで研修を受け入れたりしています。内容はファーマーズコース38万円ぐらいで、これは即戦力の有機農家を目指して現場と座学をやる。BLOF理論を基礎理論にしています。また、プロ農家で慣行から有機を目指したいという方もいて、BLOF理論だけを半額で行う座学のコースもやっています。資金はいろんなところに呼びかけて農機具、農業関連の企業や、食の関係、生協も有機農業者を増やしていきたいのであれば応援したいと、組合員

さんがすごく協力してくれまして相当大変です。だから国で農家にボンとお金を出すのではなく、育成するところにお金を入れた方がいいと感じます。福岡の学校の場合、受講生は様々で、最初生徒さんは5、6人で男性ばかり。今は40人を超えてそのうちの半分以上は女性です。また、例えば農機具メーカーの社員を研修で勉強に1年間やらせたり、様々な分野から有機の勉強したいと求られて、ガッツリ新規就農をしようと思ってる方と仕事しながら学びたいという方と企業、農業関係では肥料会社や農機具メーカーだったり、管理栄養士だったり、そういう方たちが学びに来られています。

**田口氏**・地域計画はいい加減に立てると形骸化する。一方で全集落が計画を作らなきゃいけないことをチャンスとして捉え、時間がかかっても丁寧にやっていくことも手かと思っています。地域で土地を管理しながらできることを、地域として戦略を持つ方法があってもいいなと思います。農水省とは地道に戦っていくしかないと思っています。

**田中氏**・もう一つ大事なお金のこと、有機農業の学校をやることと先輩農家へ学生を連れて行って勉強させてもらう。その農家

が持っているすごい技術ですが、それを公開してもらおうことに、タダが当たり前という雰囲気が多かったんです。お金はかかりませんが、対価を払っても運営できるといっていきなると学校としては疲弊していきなると農家はいい人に限って自分のことを後回しにするけれど、ちゃんと対価を出せるような形にしないと、もつともつと疲弊していくと思います。

**田口氏**・地域計画は農地のことだけ考えると、暮らしが置いていかれる。農水省と交渉して、もう少し期間を延ばして丁寧にやる。少なくともこれから集落は多分持たないところがいっぱい出てくるのに、たまたまを考えることができるか、じり貧になって潰れていくかによって地域の人の感情が違っているので、そのためには体力があるうちに状況整理をする作業が必要で、集落点検は日本の全ての農村がやるべきだというスタンスです。

**山下氏**・田口先生、攻めの政策、移住を考えている人に対して、村の人たちがアクションを起こしたような事例や効果的なことがあれば教えて下さい。

**田口氏**・今基本的に地域は空き家がなくて移住希望者がいるから、地域の方がモテている状態です。だから選べるんです。ど

ういう人がいいか、どういうマッチングをするのかは結構重要で、基本的に移住は結婚と一緒に、純恋愛じゃなくてお見合い結婚なので、お見合い写真を配り、交流会が開かれ、交流期間を作って、集落の会合や草刈りなど、地域との関係が出来上がってから移住するとスムーズです。もう一つは地域側でどういう移住者が欲しいかアクションをおこしているケースもあって、絶対条件、できれば条件、あわよくば条件を決め、こういう移住者に来てほしいという固有名詞を全集落で決めて、東京の移住フェアで8割以上の希望者を断り、1割ぐらいの人を見つけていい感じをやっている。地域は自己評価が低いのですが、今モチ期です。自分と気が合う人を選び、いい人が来ると相乗効果にもなる。1回失敗すると人間不信に陥っちゃうのはもう恋愛と一緒にです。マッチングアプリで出会ってお付き合いをいかに丁寧にやるかだと思います。